

## 植民地台湾における女性三曲師匠の家庭の変化とキャリア形成

福田 千絵

本発表は、植民地台湾（1885-1945）における日本人の女性三曲師匠について、同地の新聞や雑誌、伝記等の資料をもとに、新しい土地でどのように活動を展開したのかを考察し、その特徴を明らかにしようとするものである。

三曲のうち地歌と箏曲は、現代では女性師匠が多数を占めるが、江戸時代には専門家は男性であった。しかしながら、明治初年の当道座解体後は女性の進出がめざましく、戦前にはすでに女性師匠が主流であった。そして、女性ならではの家庭の変化による音楽活動の変化は、この時代にも顕著であった。なかでも熊本出身で台湾に移住した船田喜久は、1915年から1930年まで名師匠として台北で活動したが、彼女の伝記をひもとくと、新しい土地での教授活動の始め方、結婚や出産、姑との同居などの家庭の変化にともなう音楽活動の変化、後継者の育成の過程などを知ることができる。喜久は、独身のうちに身を立てるために移住したが、結婚後、尺八家の夫の転勤にともない台湾に移住した女性師匠も少なくない。また、台湾で活動しながら東京や大阪に短期間の研修に出かける女性師匠も珍しくなかった。植民地台湾の女性師匠は、居住地の他の師匠や家族との関係だけでなく、内地の動向にも意識を向け、ライフステージの変化に対応しながら師匠としてのキャリア形成を積み重ねていった。現代にも通じる女性の音楽家としての働き方について、植民地台湾の事例を通して考察したい。